

Newsletter 15

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第15号 / 2010年1月15日発行

Contents

- 1 巻頭言 明治7年1月1日の詞…独立と勇力とは…
- 2 特集 特定研究全体
セクションⅠ「アート」／セクションⅡ「フィールド・アクティビティ」／
セクションⅢ「コミュニティ」／セクションⅣ「コミュニケーション」／
セクションⅤ「発信・評価・システムデザイン」
- 6 活動報告 学び場プロジェクト：ピア・メンター、アカデミック・スキルズ公開講座、教員
サポート／庄内セミナー／実験授業：音楽実験授業、文学実験授業／2009年
度日吉キャンパス公開講座／日吉行事企画委員会（HAPP）秋学期の活動
- 8 ニュースフラッシュ アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション／慶應義塾コレギウム・
ムジクム演奏会／サイエンス・カフェ／基盤研究カリキュラム研究シンポジウム／
『芸術と福祉』国際会議／教養研究センター選書採択のお知らせ
- 8 事務局だより



Foreword



明治7年1月1日の詞 …独立と勇力とは…

教養研究センター副所長
不破有理（経済学部）
Yuri Fuwa

我輩は今日慶應義塾に在りて明治七年一月一日に逢えり。この年号は我国独立の年号なり、この塾は我社中独立の塾なり。独立の塾に居て独立の新年に逢うを得るは、また悦ばしからずや。蓋しこれを^{けだ}得て悦ぶべきものは、これを失えば^{よろこ}悲しみとなるべし、故に今日悦ぶの時に於いて他日悲しむの時あるを忘るべからず。

『学問のすゝめ』五編

『学問のすゝめ』は全17編のうち、初編は20万部を超え、福澤諭吉自身の序文によれば海賊版も出回り「当時の日本の人口3500万とすれば、160人に一人が読んだ」というまさしく当時の大ベストセラーです。明治維新から七年足らず、国家の独立が脅かされる危惧を世の学者が喧しく議論した折のこと、新年の祝辞として福澤は慶應義塾という「私立」の学塾において独立を保つ喜びを語ります。福澤諭吉は「独立」の二文字にこだわりました。官ではなく、独立した学塾において個々の独立の気を養えば、それが国家の独立にも帰するものであると信じていたのです。

明治の激流に屹立することは決して容易いことではなく、「非常の勇力」が必要とされると記しています。この場合の勇力と

は何でしょうか。福澤は記します、そもそも人の勇力は、ただの読書のみで得られるものではないと。読書は学問の術であり、学問は事をなすための術である。実地に接して事に慣れるのでなければ人の勇力を育てることはできない、と。

昨今大学をめぐる法的な規制の変化によって、しばしば大学人の間でFDという言葉が交わされるのを耳にします。FD（Faculty Development）といえ、大学教員のやる気を向上させ、教育力を向上しようという意味で用いられ、もちろんその趣旨を否定するものではありません。しかし同時に「上意下達」方式の「上から目線」的なニュアンスを感じるのは私だけでしょうか。FDのFacultyは「学部の構成員」という意味で用いられていますが、元来この語は、個人に備わる心身両面の能力を意味します。FDとは、ひとりひとりが備えた潜在的な心身の能力を存分に発達させることであれば、まさに福澤の語る人の勇力にもつながるのかもしれませんが。明治維新の激動期を乗り越えるために必要とされた「人のすぐれた力量」は、二千年紀の幕開けから十年目を迎える今年においても、慶應という学塾で独立した気概を生かすために大いに必要とされるはず。教養研究センターは「行動する教養学」を標榜し、知性に加え、身体を用いる多様な学びの場を提供しています。その中で学生とともに教員も育つのです。センターが「混沌の中に漂いながら手を差し伸べている者同士が結びつく」（種村和史副所長の言）助けをする場、しかも、おバカな笑いという、途方もなく強力な破壊的創造の力（武藤浩史副所長の主張）によって育ち合う機会を得るHUB（バブではありません！）となることを願っています。そして、福澤諭吉が願ったように、これから数十年のちに省みて、同じく独立を寿ぐ新年でありますように。

特定研究全体

教養研究センター副所長

武藤浩史（法学部）

Hiroshi Muto

昨年来、教養研究センターでは、同センターの特定研究であった文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」（2000年～2007年）の終了を受けて、次の特定研究テーマを定めるべく、ワーキンググループを立ち上げて、準備作業を行ってきました。その成果として、本センターで開発した身体知教育と言語教育のノウハウを取り入れ、「身体知教育を通して行う教養言語力育成——慶應義塾「語力」開発のモデル提示と実施」と題する教育プログラムを構築し、文部科学省の大学教育推進プログラム【テーマA】に応募して、この度めでたく採択の運びとなりました。2009年度から2011年度にかけての3年間のプロジェクトとなります。以下に、その概要を記します。

本取組は、**社会の先導者に必要な言語力は実体験を通してリーダーシップスキルと合わせて育成されなければいけない**という考えの下、慶應義塾大学で教養研究センターを中心として開発した**身体知教育（身体的気づきを導く体験型授業）**のノウハウを活用して、芸術、フィールドアクティビティ、コミュニティ作り、コミュニケーション、本・雑誌作りなどの体験型授業によって、優秀な大学生にふさわしい言葉の力＝**教養言語力を習得させる教育モデルを提示かつ実施**するものです。

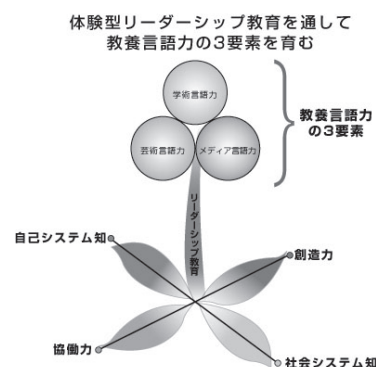
慶應義塾の重要な教育方針として「語力」教育があり、それは「日本語、外国語を含めて、言葉を明確に運用する思考力を身につけるための教育」と定義されます。その一端は外国語教育によって担われますが、上の語力教育の定義から明らかなのは、外国語教育に特化しない形の、**思考力育成とも結びついた一般的言語能力開発**の企てが行われない限り、語力教育は不十分だといえます。今回の取組は、「語力」教育のその部分（思考力開発とリンクした全般的言語力の育成）の実現を目指すものです。

これまで、慶應義塾大学では学部や研究所設置の少人数クラスで基礎「語力」の育成を行ってきました。しかし、社会のリーダーたるにふさわしい言語力はそれでは不十分です。本取組では**基礎の上の中上級レベルの言語力を教養言語力と名づけて、これを社会で必要とされる3つの言語力——学術言語力（選んだテーマを十分に調査して論文にまとめる力）、芸術言語力（言語を創造的に駆使する力）、メディア言語力（社会に発信する力）——に分け、相互に関連させつつ初年次よりトップクラスの言語力の育成を目指します。**

本取組では、社会のリーダーに必要なのは**創造力と協働力**、そして**自己システム**を知ることと**社会システム**を知ることであるという認識の下、5つのセクションに分け、その内4つをこれらの能力と知をバランスよく獲得するために、残る1つを発信・評価・システムデザインに当てて、相互に関連する全5セクションの**身体知教育（身体的気づきを導く体験型授業）**を通して総合的な言語力を育成するプログラムの開発を目指します。

- (1) **セクションⅠ「アート」**は、芸術（文学、演劇、古典、音楽）を通して主に**自己**についての授業を行い、**創造力**開発とともに、**芸術・学術言語力の育成**を目指します。
- (2) **セクションⅡ「フィールド・アクティビティ」**は、フィールド活動を通して主に**社会**についての授業を行い、**協働力**開発とともに、**学術・メディア言語力の育成**を目指します。
- (3) **セクションⅢ「コミュニティ」**は、コミュニティ作りを通して主に**社会**についての授業を行い、**創造力**開発とともに、**メディア・芸術言語力の育成**を目指します。
- (4) **セクションⅣ「コミュニケーション」**は、コミュニケーション学習を通して主に**自己**についての授業を行い、**協働力**開発とともに、**学術・芸術言語力育成**を目指します。
- (5) **セクションⅤ「発信・評価・システムデザイン」**は、雑誌作り・本作りなどの**発信編集スキル**を授業で学習し、セクションⅠからⅣまでの**成果を統合的・戦略的に発信**します。と同時に、「身体・言語・文化デザイン研究会」を発足し、**評価方法**も含めて本取組の成果を社会に発信・還元する新しい**システムのデザイン**を行います。

以上の取組を基礎として、**社会のリーダーたるにふさわしい身体知に基づいた言語力を育成するカリキュラムを本学に構築・定着**させ、その成果を国内外に広く発信します。



Article—①

セクションⅠ

「アート」

特定研究セクションⅠ「アート」は、芸術作品を用いた身体知教育型の授業（文学、演劇、古典芸能、音楽）を通して、主として自己システムについての知識・理解を深めるもので、創造力開発を通じて芸術言語力と学術言語力育成を目指します。具体的には、次の①から④の4つの部分から構成されます。

①では、小説その他文学作品を解釈し、朗読し、身体知的ワークショップを体験した上で創作を行うといった内容に、外国語教育（翻訳や英語創作）の問題を絡めて、体験型文学教育のモデルを完成させます。具体的には、2007年から2009年までの3年間の夏季実験授業の成果を踏まえて、2010年夏より「身体知」という名称の科目を夏季集中講座として正規授業化し、そこで文学作品を中心として、さまざまな芸術体験をクロスさせます。

②は①と対を成し、現行の英語演劇教育を発展させ、戯曲を読み、訳し、演じ、創作するという、外国語教育を含む総合的な言語教育モデルを提示します。具体的には、「英語ドラマ」のクラスで、読解、解釈、朗読を行い、最終的成果として英語劇を上演します。

③では、古典芸能（狂言）を題材に用いて実践者（狂言師）を招き、体験と知識を連携させて日本の伝統文化を学ばせ、学術言語力を高めつつ、さらに、すでに蓄積のある①の文学教育のノウハウを用いて、創造型（創作、英語翻訳）の作業も含めて、芸術言語力を磨かせます。具体的には、狂言師を呼んでワークショップを開催すると同時に、授業化に向けてさまざまな教育実験を行います。

④は③と対を成す試みで、弦楽四重奏団をはじめとする音楽家を招いて、古典音楽を体験させつつ、芸術と社会・歴史の繋がりについての講義により、体験と知識を合体させ、最後は演奏会のプログラム用論文執筆を通して、学術言語力を育成します。具体的には、現在進行中の音楽実験授業「楽器の声に託された生と死」を皮切りとして、教育実験を積んで、正規授業化を目指します。

（武藤浩史）

Article—②

セクションⅡ

「フィールド・アクティビティ」

特定研究セクションⅡ「フィールド・アクティビティ」は、教室での講義と大学キャンパス外で行う活動を組み合わせることで、学問に対する理解を深めることを目指します。

この目標のもとでは、キャンパス外での学びは単に外での活動だけでは十分でなく、そこで学んだ内容を大学に持ち帰り、言語化し、外部に発表することまでを行って初めて完了するものとしています。とはいえ、キャンパス外で行う活動は重要であることは言うまでもありません。

当セクションでは、大きく分けて次の4つのグループが活動する予定です。まず、1番目のグループは、日吉キャンパスが位置する地元・横浜市港北区日吉地区を舞台に活動します。ここでは、「地域との対話」をキーワードに、日吉に生活する人々との調査・交流・活動を体験します。2番目は、横浜市中区寿町を中心とした活動を行うグループです。ここでは、横浜市および社会起業家と連携して、実際にまちづくりに参加することを行います。以上に加えて、3番目には都市の公共空間を中心に情報メディアを活用した新しいライフスタイルの提案を考えるグループがあります。ここでは、ICT（情報通信技術）と都市の関係づくりに取り組む予定です。さらに、4番目のグループは地方都市で直面する地域の活性化問題について、地方を実際に訪れて調査を行います。

以上に挙げた多岐にわたる活動が成功するためには、キャンパス内で大学での研究方法を学ぶことが大変重要になります。特に、このセクションでは調査と研究の結果を文章化して発表することを目指しているため、参加学生が調査技法を体系的に学ぶことは必要です。この過程で学生諸君が大学レベルで研究を行うことについて学ぶことでしょう。このような考えのもと、当セクションは活動していきます。

最後になりますが、各活動の内容は、他のセクションの活動と十分な連携を取る必要があると考えていますので、連携を上手に取って活動を活性化していきたいと思います。

（長田 進）

Article—③

セクション III

「コミュニティ」

特定研究のセクション III 「コミュニティ」は、多様な人びとが出会い集い共生するコミュニティ作りを通して、キャンパス内外の社会システムについての知識・理解を深めることを目指します。また、それらのコミュニティの中で身体知教育型の授業を展開し、学生の創造力を刺激してさまざまな表現力を養うことで、芸術言語力やメディア言語力の育成を目指すことが次の目標です。

教養研究センターでは、港区や三田商店街の協力を得て、インター・キャンパス「三田の家」を設立し、この活動は新しい大学教育の場として内外からの注目を集めています。「三田の家」の運営のノウハウを生かして、メンバーたちが「芝の家」のコミュニティづくりにも参画していることはニュースレター 13 号でもご紹介したとおりです。

日吉キャンパスでもそのようなコミュニティの萌芽がいたるところに見られます。まず日吉キャンパスの新しい教室棟（第4校舎独立館）にできた日吉コミュニケーション・ラウンジがそのひとつです。和室「日吉の家」をはじめとし、新たな学びのスペースが開設され、外国語教育研究センターと国際センターと協力して、教養研究センターも場の利用法とコンテンツを積極的に考えていくこととなりました。同時に日吉メディアセンターとの協力で、新しい学びの場としての図書館の構築を進めていることも、注目していただきたい活動のひとつです。たとえば、日吉メディアセンターのレファレンスデスクでは、アカデミック・スキルズ修了者の学部生がピア・メンターとして図書館員と大学院生と協働で、仲間の学生の学びの手助けにかかわっています。同時に新しい学びと生活の場として、日吉メディアセンターのインフラも大きく変わりつつあります。勉強するだけでなく、仲間と議論しあい、勉強や調査に行き詰ったときは、相談にのってもらえる日常生活の一部が図書館なのです。

このように、日吉キャンパス内で新たなアカデミック・コミュニティを形成していくと同時に、セクション III ではこの学び場をさらに外へ広げることも視野に入れています。その一例が「寿の家（仮称）」の立ち上げです。この新しい「家」は横浜市と横浜で活動する社会起業家、NPO団体との協働で、横浜市中区寿町でコミュニティ作りを展開するための拠点です。2009 年 12 月に開設したこの拠点は、これから地域と慶應義塾、そして横浜市の構想する創造拠点をつなぐ場所として機能していくことになります。

この3つの地域（三田・日吉・寿）の共通理念は、他者と出会い、共生できる場を作ることです。通学生、留学生、通信教育部で学ぶ社会人学生、キャンパス近くの地域住民の交流のみならず、年代の異なる子ども、老人、障がい者などの多様な人々が出会い、共生するさまざまな機会を経て、新たなコミュニティが形成されていくことでしょう。このコミュニティでは大学生が、地域住民や地域で活動する芸術家、社会人と交流しつつ、さまざまな表現力を通して新しいコミュニケーションと共生のあり方を模索する場所でもあります。セクション II やセクション IV で展開される対自己・対他関係の意識化と育成法の研究成果をセクション III で応用し、セクション I で体得される芸術表現をコミュニティづくりのツールとすることで、他のセクションとも連携を図りながら、身体的気づきと身体を使う新しい表現力を言語表現へとつなげていくことが、セクション III の最終目標となります。また、各セクションの試みを、この3つの拠点をつなぎ合わせながら縦横無尽に展開していくハブとしても、セクション III は機能していきます。そしてこれらの活動内容はセクション V を通して発信され、さらに大きなコミュニティ作りへとつながっていくことでしょう。

これから数々の試みがそれぞれの拠点で展開されます。多くの皆様方の参加と協力をお待ちしております。

（横山千晶）



横浜市中区石川町 5-209-3
寿の家（仮称）外観



横浜市中区松影町 3-11-2HV フロントオフィス
寿カフェ（仮称）（横浜ホステルヴィレッジフロントオフィス）

Article—④

セクション IV

「コミュニケーション」

セクション IV「コミュニケーション」は、セクション III の対として、アート・オブ・コミュニケーション（「交流の技術」と「交流のための芸術」）の二つの意味）をキーワードとし、造形芸術をも用いつつ臨床心理学の識見を生かしたコミュニケーションの学習を通して、学術言語力や芸術言語力の育成を目指します。アサーションとコンフリクト・マネジメントという、開かれたコミュニケーションを達成するために必須の課題に、臨床心理学の専門家が主導しつつ、セクション I に関わる他領域の実践者と協働しながら、取り組んでいきます。また、セクション II や III とも連動しながら事業を展開しつつ、心理学的メタスキルを教えることにより他セクションに貢献します。アートをを用いたコミュニケーション学習の過程で芸術言語力を磨き、臨床心理学のテーマで論文を執筆させることで学術言語力を磨きます。今年度は、いくつかの個々のワークショップの他には、以下に記す身体知実験授業をセクション I と協働して、行っています。

今年度は、文部科学省の支援をうけ「身体知教育を通して行う教養言語力育成」授業という位置づけで、「体をひらく、心をひらく」から「体をひらく、言葉をひらく」の新しい装いのもと、コミュニケーション力、協働力を身体アート表現を通して養成すべく、物語上演の最終発表に向け追い込み中です。前段は、臨床心理学的視点から、体の緊張をほぐす、香をかぐ、ブラインドワークなど、五感や身体感覚にふれての気づきや自己の確認を通しての対自的コミュニケーション力、また言葉で伝える際の視線や、顔の表情のパワーを、言葉ぬきで体験するなど、どう身体を活かして思いを伝え、相手の話をうけとめるかという対他的コミュニケーション力をみがきました。特にブラインドワークは、不安と同時に、視覚がさえぎられることで、触覚など別の感覚が活性化され非日常の世界を渉猟する面白さを感じたのが不思議です。

中段は、気にいった物語の書き換えの個人発表のあと、交渉しながらグループを形成、共同で物語の展開や構成の作り換えをグループごとに行いました。個人発表では参加者達の何人かが、俄然生き生きと、マイクをにぎりしめ、身振り手振りもあざやかで、若者達の自己表現への情熱のほとばしりを見た思いです。しかし、グループでの作り替えでは、遠慮やさまざまな思いが働いたためか、自分も相手も納得できるようなコミュニケーションになかなか苦闘している様子もなかにはありました。でもそれこそが学生達を鍛えてくれるのでしょう。

後段、アーティストを招き、衣装、装置小道具などの造形や、ムーブメントやふりなど、言葉以外に、どのように別のメディアを加えていくか、造形作家によるグループごとのコンサルテーション、ダンサーによるワークショップを行いました。鬼の特徴を派手なハイヒールを角に見立て赤いマントをはおるというアイデアや、赤頭巾役を桃の赤と森の緑を象徴する長い布を持った参加者達

が、床に転がりからみあううちに、自然な動きが生まれ、物語展開の確かな感触を得るなど、身体アートは、熱き想いと夢の交錯する混沌のなか、どんな物語を生みだすのか、楽しみです。（手塚千鶴子）

Article—⑤

セクション V

「発信・評価・システムデザイン」

セクション I から IV までの活動の成果をまとめて発信すること、またプロジェクト全体の評価方法を含めたシステムデザインをおこなうこと、この 2 つがセクション V の役割です。

成果の発信は「本づくり」をテーマとする実験授業「エディティング・スキルズ」を軸に進められます。「本づくり」には、企画、取材、執筆、組版、造本、さらに流通にいたるまで、さまざまな段階があります。このなかから特定の作業を選んで限定的に取り上げるのではなく、すべての行程を通して体験的に学び、とりわけ編集にかかわる総合的な語力（執筆、校正、交渉の能力）を身につけることを目指します。DTP の実践的な技能を養い、出版物としての本を完成させることは、いうまでもなく必須の課題となりますが、それとともに「本」という古典的メディアのもつ新鮮な可能性を発見するために、参加する学生一人ひとりが「手づくり本」を制作することもプログラムに盛りこんでいます。ここには手作業を通じて「本への愛」を醸成したいという願いがこめられています。現在進行中の特定研究 Web サイト構築を通してインターネット時代の技術を学ぶとともに、「本づくり」の伝統技術を学ぶことで、過去と未来の発信技術を接続します。

Web サイトを通して成果を随時発信することと並行して、各セクションの活動状況をまとめた小冊子（中間報告）の刊行を 2 年目に、最終的な活動報告としての本の刊行を 3 年目に予定しています。初年度の活動は昨秋から始まりましたが、目下のところ、法学部の学生が執筆する日本語とフランス語バイリンガルのニューズレターを素材として、外国語学習とリンクさせながら編集作業の基礎を学ぶワークショップを開いています。2 年目から、対象となる学生を拡大して、全学部的な取り組みとします。

セクション相互の協力態勢はこのプロジェクト全体にとって重要な意味をもちますが、各セクションの成果をまとめて発信するこのセクション V には、とりわけその要となることが求められています。この役割をより大局的な視点から支えるのが「身体・言語・文化デザイン研究会」です。セクション横断的に活動し、システムデザイン・マネジメント研究科の協力を得て、成果を社会に発信・還元する新しいシステムをデザインし、プロジェクトの評価方法の開発をおこないます。（笠井裕之）

学び場プロジェクト

ピア・メンター

教養研究センター・日吉メディアセンター共同プロジェクト「学生のための学習環境を整える」の一環としての「日吉学習相談アワー」が秋学期も10月5日（月）～1月15日（金）の日程で、開催されました。アカデミック・スキルズ修了生の有志諸君が相談員としてレファレンスデスクに座り、文献の探し方・レポートの書き方などで困っている学生からの相談に応じました。それとともに、相談員たちは、この取り組みを持続可能なものとするためのシステム・ルール作り、活動のための資料・環境整備などにも取り組みました。1月には、日吉メディアセンター内で企画展示も行います。まさに「半学半教」の場が学生主体で作り上げられようとしています。

昨年度から始まった、学び場プロジェクトも今年で二年、これまでの活動の総まとめをし、さらなる展開につなげるために、本年度中の刊行を目指し、現在急ピッチで報告書の作成も行われています。

庄内セミナー

昨年度の鶴岡セミナーに続いて、今年度はフィールドを庄内に広げ、教養研究センター主催・東北公益文科大学（公益大）共催として庄内セミナーを開催しました（参加者は慶應大13名、公益大6名）。セミナーは8月31日（月）から9月3日（木）までの庄内での合宿セミナーと11月14日（土）の日吉での報告会から構成されています。「松ヶ岡開墾場に学ぶ『生命』（いのち）のつながり」をテーマに、明治維新期の元庄内藩士による松ヶ岡開墾と、この重労働を支えた精神的背景というべき藩校・致道館で講じられた徂徠学について体験的に学びました。松ヶ岡については酒井忠久氏（致道博物館館長）、徂徠学については松村宏氏（慶應義塾大学名誉教授）に講義していただき、加えて一般公開企画として東山昭子氏（鶴岡市総合研究所顧問）による庄内の文学、須藤良弘氏（元酒田市史編纂専門委員）による酒田港の歴史に関する講演も拝聴しました。さらに羽黒山登山、羽黒山伏による八朔祭の見学、山田鉄哉氏（松ヶ岡開墾場理事長）のご指導でだだ茶豆、サツマイモの収穫作業とこれを使った夕食作り、鶴岡市内でのフィールドワークなどを行い、3日には4グループに分かれた学生たちの中間報告がなされました。その後、グループごとに連絡を取り合いながら、最終報告を目指したグループワークを継続し、11月14日（土）の報告会では各グループが現代的な観点から羽黒修験、地方活性化の庄内モデル（スタンダード）、致道館教育の意義についてプレゼンテーションを行いました。酒井氏、松村氏のほか松ヶ岡開墾場の管理運営をいらっしやる酒井忠順氏（松岡物産株式会社社長）、大歳恒彦氏（公益大公益学研究科長）などから厳しくも好意的なコメントをいただき、報告会は無事終了しました。鶴岡市をはじめとする関係者の皆さん、本当にありがとうございました。

（付記：庄内観光コンベンション協会、日吉メディアセンター、慶應義塾生活協同組合のご協力で展示企画「慶應義塾と庄内」、庄内フェアを開催しました。）

（羽田 功）

アカデミック・スキルズ公開講座

「学生のための学習環境を整える」プロジェクトの一環として、「アカデミック・スキルズ公開講座」が開催されました。教養研究センターが設置する「アカデミック・スキルズ」（アカスキ）は、論文の書き方・発表の仕方など、大学で自主的に学習活動を行うために1・2年生が習得しておくべき内容を豊かに含んでいます。履修者のみならずたくさんの学生に参加してもらおうと、普段の教室から日吉メディアセンター内のオープンスペースへ飛び出して授業を行いました。1回目は10月14日（水）「テーマを選ぶ・決める」「プレゼンテーションの基礎」、2回目は11月4日（水）「さまざまな論点のマッピングと要約」でした。大学院生を含む多様な学生が「飛び入り」参加し心地よい緊張感を伴った授業は、アカスキ履修学生にとっても、教員にとっても新鮮な知的刺激を与えるものでした。この試みは来年度も引き続き行われる予定です。

教員サポート

11月18日（水）、教員サポートワークショップ「少人数セミナーの指導法について——“アカスキ”のノウハウを盗もう！——」が開催されました。「アカデミック・スキルズ」は、複数教員によるチーム・ティーチング、プレゼンテーション・コンペティションの開催・論文集の発行、より高度なスキル習得を目指す中級クラスの設置、などの様々な特色を持っています。本セミナーでは、各学部で展開されている少人数セミナーにも役立つノウハウと経験を、篠原俊吾氏（法学部）をはじめとするアカスキを担当している先生方に語ってもらいました。会場にはたくさんの先生方が詰めかけ、活発な意見交換が行われ、アカスキおよび少人数セミナーの教授法に対する関心の深さがうかがわれました。さらに、慶應義塾高等学校卒業論文指導の取り組みも紹介いただき、一貫教育の可能性についても議論が交わされました。

（種村和史）



庄内藩藩校、致道館にて

実験授業

音楽実験授業

2009年10月から12月にかけて、未来先端基金採択プログラム「声と身体と歴史文化の接点その2——演奏家とのコラボレーションによる授業実践『楽器の声に託された生と死』」が開催されました。横山千晶所長（法学部）の統括の下、佐藤望氏（商学部）、新谷崇（法学部）、武藤浩史氏（法学部）、高橋宣也氏（文学部）が各回を担当。日本を代表する常設弦楽四重奏団「カルテット・エクセルシオ」の生演奏を交えつつ、西洋古典音楽の精髓ともいべき弦楽四重奏について多角的に学ぶ贅沢な企画で、塾外の音大生や現役ホールマネージャー、音楽事務所社員から受講申し込みが相次ぎ、プロの音響設計技術者から協力の申し出をいただくなど、意外な反響を呼びました。成果は、1月15日（金）に授業参加者の運営による「カルテット・エクセルシオ特別コンサート」（於日吉キャンパス協生館「藤原洋記念ホール」、HAPP 主催）という形で結実する予定です。（新谷 崇）

文学実験授業

8月10日（月）から8月15日（土）にかけて、日吉キャンパス来往舎中会議室にて、2009年度の夏季文学実験授業＜J. M. クッツェーの謝肉祭＞が行われました。クッツェーの『恥辱』と『動物のいのち』に焦点を当て、＜動物とは何か？＞という根源的な問いについて考察を深めました。学内からは、荒金直人氏（理工学部）、吉田恭子氏（文学部）、学外からはすがぼん氏（アーティスト）、大藏基誠氏（能楽師）、松井周氏（劇作家）、黒沢美香氏（ダンサー）を講師に迎え、哲学、詩、パントマイム、狂言、演劇、ダンスなどの実践を交えながら、クッツェー文学が投げかける人間および動物の＜身体性＞をめぐる切実な問いに創造／想像的に応答しました。通常の授業では困難な思考と身体のコラボレーションを実践する有意義な一週間でした。（佐藤元状）

2009年度日吉キャンパス公開講座

本年度の秋学期講座は、今年が世界天文年に当たることに因み、「天からの文（ふみ）を読み解いてみよう」という共通タイトルで開催しました。例年と同じく10日間計20コマのオムニバス講座で、9月26日（土）から12月5日（土）までの土曜3・4限に設置し、塾の内外から広く講師を招きました。そのうち約半数の講座では、天文学の初歩や歴史から最新の研究成果までを論じ、残る半数では宇宙開発などの先端テクノロジー、人文分野においては美術、シェイクスピアからSFにいたるまでの文学など、人間が星々との関わりの中で築きあげてきたものを多角的に取り上げました。10月31日（土）にはガリレオ裁判をテーマに、駐日教皇大使であるカステッロ大司教のご出講を得ました。（坂本 光）

日吉行事企画委員会（HAPP）秋学期の活動

日吉行事企画委員会（HAPP）の秋学期の活動についてご紹介します。この委員会では、①新入生歓迎セクションと②公募企画セクションを二本の柱と定めて行事を企画・開催しています。新入生歓迎セクションは、一流の演者を招いて実施する依頼型のプロジェクトです。「特別企画」は秋学期に実施する春学期型の企画です。公募企画セクションは、主として秋学期に行う公募型のプロジェクトです。詳しくはホームページをご覧ください（<http://happ.hc.keio.ac.jp/>）。（小菅隼人）

	企画者	企画名	日時・会場	内容
1	経済学部准教授 津田真弓	知って触る浮世絵展 —高橋誠一郎浮世絵コレクション学習イベント—	展示：9月25日（金）～10月2日（金） 10:00～18:00 来往舎ギャラリー、講演会『木村八重子氏「『東海道五十三次』の謎」（歌川広重の浮世絵について）：9月26日（土）13:30～15:30 独立館 D205 教室	高橋コレクションを知る、浮世絵で東海道を旅する。目を閉じて浮世絵を「見る」体験。
2	理工学部教授 森 泉	特別企画 OTO の会 新作コンサートシリーズ No.11 来往舎 秋・空・響 Part2 ～音の舞～	10月3日（土）16:00～18:30 来往舎イベントテラス	邦楽・洋楽のための新曲にダンスを組み入れた、音と身体表現融合の試みである。
3	経済学部2年 齋藤哲範	DIVERTAII2	10月14日（水）・15日（木）18:30～19:45 来往舎イベントテラス	ジャグリングを中心としたステージパフォーマンスショー。
4	理工学部3年 神田聡太郎	色彩と記憶の音楽	10月22日（木）17:00～19:00 来往舎イベントテラス	楽器演奏とそれに連動した映像による時間と空間の表現。
5	経済学部准教授 長沖暁子	特別企画 塾長と日吉の森を歩こう	10月31日（土）日吉キャンパス	塾長と学生がともに日吉の森を散策。
6	メディアデザイン研究科 修士1年 朴 正娟	魔法はヒカリに乗って	11月2日（月）19:30～20:30 協生館藤原洋記念ホール	複数の会場を高速ネットワークで繋ぐ技術を使った韓国との共同公演。
7	経済学部4年 大庭将裕	Labyrinth	11月30日（月）～12月5日（土）15:00～21:00 来往舎イベントテラス	鑑賞者を巻き込み変化する、光と音を用いたメディアアート作品の展示。
8	文学部3年 大下裕司	『09→10』展	12月14日（月）～22日（火）10:00～19:00 ※初日は13:00から、最終日は15:00まで来往舎ギャラリー	「2009年～」という視点のもと若手作家の合同展を行う。
9	文学部准教授 高橋宣也 法学部専任講師 新谷 崇	弦楽四重奏の世界 カルテット・エクセルシオ特別コンサート	1月15日（金）18:30～20:00 協生館藤原洋記念ホール	斯界注目のカルテットがクラシック音楽の真髄に迫る本格的演奏会。

アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション

本年度もアカデミック・スキルズを締めくくるイベントとして、2010年2月4日(木)15:00より、日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにて、プレゼンテーション・コンペティションが開催されます。塾内外からのさまざまな観客を前に、各クラスから選抜された7～8名の代表者が、長い時間をかけて作り上げてきた論考に関する熱いプレゼンテーションバトルを繰り広げます。聴衆を思わず唸らせる発表が目白押しです。みなさんもこの熱いバトルの目撃者になってみませんか。アカデミック・スキルズ受講者、担当教員一同、みなさまのお越しを心よりお待ちしております。(篠原俊吾)

サイエンス・カフェ

日本の子供たちが理科や学問に興味を無くすのは、大人が妙な「教育」をしすぎるせいなのではないか? という疑問を感じることがあります。巷にあふれる様々な「教室」で様々な「解答」を与えられる子供たちには、自然の不思議さに触れる暇がないのではないかとサイエンス・カフェでは、「わからないこと」「美しく不思議なこと」などを伝えられたら…とカフェマスターは考えます。次回カフェは1月23日(土)、日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにてメダカの雄と雌のお話です。(鈴木 忠)

『芸術と福祉』国際会議

昨年は慶應義塾創立150年という記念の年でしたが、2009年は横浜開港150年という、こちらもまた、町の長い歴史を振り返る記念の年でした。この二つの歩みを記念し、大学と町の新しい関係の構築を模索するために、教養研究センターは「芸術と福祉」国際会議のホストをつとめました。8月17日(月)から19日(水)にわたって開催された会議は、「芸術は社会のために何ができるか・社会は芸術のために何ができるか」を副題に、コミュニティの持つ創造力と、その創造力を基盤にした町のあり方の過去・現在・未来を話し合いました。3日間にわたる会議ではシンポジウム、研究発表のみならず、横浜在住の芸術家によるコンサートやダンス・ワークショップを行ったほか、2回にわたってフィールド・トリップを開催しました。それらの中で地域で活動する社会起業家やNGO、NPO団体と活発に意見を交換し、まさにともに考え、行動する国際会議となりました。この会議で得た知見と人的つながりを土台に、2009年度から始まった特定研究をより活性化していくことが、センターのこれからの課題です。(横山千晶)

慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会

「身体知プロジェクト」の成果発表として、『慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会』を下記の通り開催致します。本公演は、日吉キャンパスで音楽の授業を履修する学生を中心としたオーケストラと合唱の演奏会です。一昨年より横浜市で開催されている「クラシック・ヨコハマ」への参加企画演奏会として、市民の皆様からも好評を頂いています。詳細は下記URLをご参照下さい。

- ・2010年1月13日(水) 18:00開場/18:30開演
- ・日吉キャンパス協生館 「藤原洋記念ホール」
- ・日吉音楽学研究室 <http://musicology.fbc.hc.keio.ac.jp/>
- ＊入場無料・当日一般先着300名

(佐藤 望)

基盤研究カリキュラム研究シンポジウム

去る11月9日(月)、来往舎シンポジウムスペースにおいて、2007-8年度の基盤研究の成果「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②——4年間を見越した教養教育の研究——」をめぐってシンポジウムが開催されました。月曜日の夜ということもあり、参加者はやや少なめでしたが、長谷山彰常任理事、羽田功前日吉主任にも参加いただき、活発な議論が展開されました。「日吉カリキュラム検討委員会」成立の意義をさらに深めるためにも、「基盤研究」は現状のカリキュラム分析と同時に共通科目の(内容を第一義的に考えた)新たなデザインを構築して教養教育の充実化を図る、という点で意見の一致が見られたと考えています。(伊藤行雄)

教養研究センター選書採択のお知らせ

所員の皆様の研究成果を広く社会に発信する企画として始まった教養研究センター選書公募も本年度で7年目を迎えました。昨年度は応募なしでしたが、今年度は5点もの応募論文があり3点が採択されました。新島進氏(経済学部)他『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜——「八十日間世界一周」の世界——』と佐藤元状氏(法学部)他『メディア・リテラシー入門』はともに、若手研究者グループによる、時宜にかなったテーマとアカデミックな独創的手法が評価されました。萩原真一氏(理工学部)の『自己生成の詩人イエイツ』は20世紀初頭に流行した「ホルモン決定論」やシュタイナハ手術などからイエイツの作品を読み直す、啓蒙的な論考です。刊行をお楽しみに。(不破有理)

事務局だより

11月に教養研究センターの事務長に着任いたしました柴田です。よろしくお願いいたします。さて、教養研究センターは設立が2002年との事で満7歳、人間で言えば小学生で育ち盛りの時期です。私にとっての第一印象はとても若々しく躍動感があり、未知なるものに挑戦しようという意気込みとバイタリティが感じられました。アカデミック・スキルズ、身体知教育(大学改革推進事業)、生命の教養学、庄内セミナー、サイエンス・カフェなどの多彩な活動や新たな取組が行われ、教員の方々が所定の教育活動の外に熱心かつバワフルに取り組んでおられる姿を見て頭が下がる思いです。今のところ順調に育っていますが、この7歳という時期は、将来の生き方を左右する大切なフェーズとも言えるのではないのでしょうか。このセンターが長期に亘って、塾生のため、社会のため、そして慶應義塾の教育研究の発展に寄与するために、今ここで、しっかりとその礎を築く必要があると思います。教養ということでは実に心許ない私ですが、微力ながらもこれまでの経験を活かし、先生方を支援しつつ当センターの発展に注力する所存ですので、各関係の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。(柴田浩平)



Newsletter
2010. January No.15

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for the Liberal Arts)

発行日: 2010年1月15日 代表: 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>